

つながる・つなげるための第一歩としての子ども食堂

私のゼミでは、市民活動が低調といわれる日本社会において、2010年代に空前の盛り上がりを見せている「子ども食堂」を手がかりに、愛知県・名古屋都市圏における人と人との結びあい（ソシアビリテ）の現状を明らかにし、その可能性を引き出す研究に取り組んできました。つながりが希薄な現代社会では、子どもが家庭、学校、地域の中で孤立しがちです。しかし、子どもの孤立を防ぐ手立ては家族や学校だけが担うものではないと思います。子どもを受け入れてくれる地域の人がいる、お兄ちゃんお姉ちゃんがいる、そういった信頼できる大人や若者につながったとき、一人の子どもの人生が大きく変わる可能性があります。従来の家庭、学校、地域（地縁）を越えたところで、新たなつながりが芽生えつつあります。その一つが子ども食堂です。

子ども食堂は、つながる・つなげるための第一歩を食においた「普通の人」による自発的な取り組みです。開催される地域、運営者、サポーターなどによって多種多様であり、食事の提供だけでなく、交流や体験、学習支援など、それぞれ創意工夫し運営されています。

子ども食堂は、日本各地で急増しています。今回研究対象となった愛知県内では少なくとも100ヵ所以上存在すると見られますが、その運営主体は、ボランティアやNPO、飲食店、宗教団体、福祉施設など多岐にわたります。そして、古い社会関係の自治会や子ども会などの枠を越えて、地域のボランティアや行政、企業が互いに緩やかにつながり、多様な種類のつながりを混合しながら、重層的につながりを張り巡らす仕組みをさまざまな形でつくっています。

今回、愛知県内の子ども食堂の運営者と利用者を対象に、はじめてのアンケート調査を行いました。子ども食堂を利用する子どもや大人への調査は非常に難しいです。本格的な分析はこれから行われる予定ですが、まずは速報値としてご報告させていただきます。お忙しいところ、多くの関係者には大変お世話になりました。改めて御礼申し上げます。

これからも、つながる・つなげるための第一歩としての子ども食堂の可能性を引き出すために、行政、企業、社会福祉協議会、NPO、ボランティアなどと連携しながら、地域におけるみんなの居場所をつくる活動に取り組んでいきたいと考えています。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

2019年2月22

成 元哲